

城の崎にて

しがなおよ
志賀直哉

山の手線の電車で跳ね飛ばされてけがをした、その後養生に、一人で但馬の城崎温泉へ出かけた。背中が脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、そんなことはあるまいと医者に言われた。二、三年で出なければ後は心配はいらない、とにかく要心は肝心だからと言われて、それで来た。三週間以上——我慢できたら五週間くらいいいものだと考えて来た。

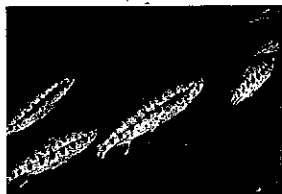
頭はまだなんだかはつきりしない。物忘れが激しくなった。しかし気分は近年になく静まって、落ち着きたいいい気持ちが出ていた。稲の取り入れの始まるころで、気候もよかったのだ。

一人きりで誰も話し相手はない。読むか書くか、ぼんやりと部屋の前の椅子に腰かけて山だの往来だのを見ているか、それでなければ散歩で暮らしていた。散歩する所は町から小さい流れについて少しづつ上りになった道にいい所があった。山の裾を回ってい

る辺りの小さなふちになった所にやまめがたくさん集まっている。そしてなおよく見ると、足に毛の生えた大きな川がにが石のようにじつとしているのを見つけることがある。夕方の食事前にはよくこの道を歩いてきた。冷え冷えとした夕方、寂しい秋の山峡を小さい清い流れについていくとき考えることはやはり沈んだことが多かった。寂しい考えだった。しかしそれには静かないいい気持ちがある。自分はよくけがのことを考えた。一つ間違えば、今ごろは青山の土の下にあお向けになって寝ているところだったと思う。青い冷たい堅い顔をして、顔の傷も背中の中もそのままで。祖父や母の死骸が脇にある。それももうお互いに何の交渉もなく、——こんなことが思い浮かぶ。それは寂しいが、それほどに自分を恐怖させない考えだった。いつかはそうなる。それがいつか？——今まではそんなことを思っ、その「いつか」を知らず知らず遠い先のことにしていた。しかし今は、それが本当にいつか知れないような気がしてきた。自分は死ぬはずだったのを助かった、何かが自分を殺さなかった、自分にはしなければならぬ仕事があるのだ、激励されることが書いてあった。実は自分もそういうふうな危うかった出来事を感じたかった。そんな気もした。しかし妙に自分の心は静まってしまった。自分の心には、何かしら死に対する親しみが起こっていた。

- 1 山の手線 山手線。東京都区部に環状に敷かれた鉄道路線。
- 2 後養生 病氣やけがなどをした後の保養のこと。
- 3 但馬 今の兵庫県北部。
- 4 城崎温泉 兵庫県豊岡市城崎町にある温泉。
- 5 脊椎カリエス 脊椎における結核性の病氣。

6 やまめ サケ科の川魚。



図「寂しい考え」の具体的内容は何か。

7 青山 東京都港区内の地名。ここでは青山墓地をさす。

8 「ロード・クライヴ」一八四〇年に刊行されたクライヴ卿（三十一）の伝記。

自分の部屋は二階で、隣のない、わりに静かな座敷だった。読み書きに疲れるとよく縁の椅子に出た。脇が玄関の屋根で、それが家へ接続する所が羽目⁹になっている。その羽目の中に蜂の巣があるらしい。虎斑¹⁰の大きな太った蜂が天気さえよければ、朝から暮れ近くまで毎日忙しそうに働いていた。蜂は羽目のあわいからすり抜けて出ると、ひとまず玄関の屋根に下りた。そこで羽や触角を前足や後ろ足で丁寧¹¹に調べると、少し歩き回るやつもあるが、すぐ細長い羽を両方へしつかりと張ってぶーんと飛び立つ。飛び立つと急に早くなつて飛んでいく。植え込みのやつでの花がちようど咲きかけで蜂はそれに群がつていた。自分は退屈すると、よく欄干から蜂の出入りを眺めていた。

ある朝のこと、自分は一匹の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。足を腹の下にぴったりとつけ、触角はだらしなく顔へ垂れ下がっていた。ほかの蜂はいっこうに冷淡だった。巣の出入りに忙しくその脇を這い回るが全く拘泥する様子はなかった。忙しく立ち働いている蜂はいかにも生きているものという感じを与えた。その脇に一匹、朝も昼も夕も、見るたびに一つ所に全く動かずにうつ向きに転がっているのを見ると、それがまたいかにも死んだものという感じを与えるのだ。それは三日ほどそのままになっていた。それは見ていて、いかにも静かな感じを与えた。寂しかった。ほかの蜂がみんな巣へ入ってしまった日暮れ、冷たい瓦の上に一つ残った死骸を見ることは寂しかった。

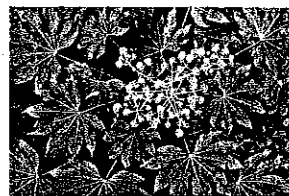
しかし、それはいかにも静かだった。

夜の間にひどい雨が降った。朝は晴れ、木の葉も地面も屋根もきれいに洗われていた。蜂の死骸はもうそこになかった。今も巣の蜂どもは元気に働いているが、死んだ蜂は雨どいを伝って地面へ流し出されたことであろう。足は縮めたまま、触角は顔へこびりついたまま、たぶん泥にまみれてどこかでじつとしていいることだろう。外界にそれを動かす次の変化が起こるまでは死骸はそこにじつとしていいるだろう。それともありに引かれていくか。それにしろ、それはいかにも静かであった。せわしくせわしく働いてばかりいた蜂が全く動くことがなくなったのだから静かである。自分はその静かさに親しみを感じた。自分は『¹²范の犯罪』という短編小説をその少し前に書いた。范という中国人が過去の出来事だった結婚前の妻と自分の友達だった男との関係に対する嫉妬から、そして自身の生理的圧迫もそれを助長し、その妻を殺すことを書いた。それは范の気持ちを主に書いて書いたが、しかし今は范の妻の気持ちを主にし、しまいに殺されて墓の下にいる、その静かさを自分は書きたいと思った。

「殺されたる范の妻」を書くかと思つた。それはとうとう書かなかつたが、自分にはそんな要求が起こつていた。その前からかかつている長編¹³の主人公の考えとは、それは大変違つてしまつた気持ちだつたので弱つた。

9 羽目 建物の壁面に、保護や意匠用に板を貼った部分。
10 虎斑 トラの背中のように、黒く太い線が数本入ったまだら模様。

11 やつで ウコギ科の常緑低木。



12 『范の犯罪』 一九一三年（大正三）十月、発表。

13 長編の主人公のちに『暗夜行路』になる作品の主人公、時任謙作。

蜂の死骸が流され、自分の眼界から消えて間もないときだった。ある午前、自分は円山川、それからその流れ出る日本海などの見える東山公園へ行くつもりで宿を出た。¹⁴「一の湯」の前から小川は往来の真ん中を緩やかに流れ、円山川へ入る。ある所まで来ると橋だの岸だのに人が立って何か川の中の物を見ながら騒いでいた。それは大きなねずみを川へ投げ込んだのを見ているのだ。ねずみは一生懸命に泳いで逃げようとする。ねずみには首の所に七寸ばかりの魚串が刺し通してあった。頭の上に三寸ほど、喉の下に三寸ほどそれが出ている。ねずみは石垣へ這い上がろうとする。子供が二、三人、四十ぐらいの車夫が一人、それへ石を投げる。なかなか当たらない。カチツカチツと石垣に当たって跳ね返った。見物人は大声で笑った。ねずみは石垣の間によりやく前足をかけた。しかし入ろうとすると魚串がすぐにつかえた。そしてまた水へ落ちる。ねずみはどうかして助かろうとしている。顔の表情は人間にわからなかったが動作の表情に、それが一生懸命であることがよくわかった。ねずみはどこかへ逃げ込むことができれば助かると思っているように、長い串を刺されたまま、また川の真ん中のほうへ泳ぎ出た。子供や車夫はますますおもしろがつて石を投げた。脇の洗い場の前で餌をあさっていた二、三羽のあひるが石が飛んでくるのでびつくりし、首を伸ばしてきよきよとした。スボツ、スボツと石が水へ投げ込まれた。あひるは頓狂な顔をして首を伸ばしたまま、鳴

図「動作の表情」とは、
どのようなものか。

14 円山川 兵庫県内を流れる川。
15 東山公園 温泉街の東の端にある公園。
16 一の湯 城崎温泉最大の共同浴場。

きながら、せわしく足を動かして上流のほうへ泳いでいった。自分はねずみの最期を見る気がしなかった。ねずみが殺されまいと、死ぬに決まった運命を担いながら、全力を尽くして逃げ回っている様子が妙に頭についた。自分は寂しい嫌な気持ちになった。あれが本当なのだと思った。自分が願っている静かさの前に、ああいう苦しみのあることは恐ろしいことだ。死後の静寂に親しみを持つにしろ、死に到達するまでのああいう動騒は恐ろしいと思った。自殺を知らない動物はいよいよ死に切るまではあの努力を続けなければならない。今自分にあのねずみのようなことが起こったら自分はどうするだろう。自分はやはりねずみと同じような努力をしなければまいか。自分は自分のけがの場合、それに近い自分になったことを思わないではいられなかった。自分はできるだけのことをしようとした。自分は自身で病院を決めた。それへ行く方法を指定した。もし医者が留守で、行つてすぐに手術の用意ができないと困ると思つて電話を先にかけてもらうことなどを頼んだ。半分意識を失った状態で、いちばん大切なことだけによく頭のはたらいたことは自分でも後から不思議に思つたくらいである。しかもこの傷が致命的なものかどうかは自分の問題だった。しかし、致命的なものかどうかを問題としながら、ほとんど死の恐怖に襲われなかったのも自分では不思議であつた。「フェータルなものか、どうか? 医者はなんと言つていた?」こうそばにいた友にきいた。「フェータルな傷

17 フェータル 命取りの致命的な。

じゃないそうだ。」こう言われた。こう言われると自分はしかし急に元気づいた。興奮から自分は非常に快活になった。フェータルなものだともし聞いたら自分はどうかだったろう。その自分はちよつと想像できない。自分は弱つたろう。しかしふだん考えているほど、死の恐怖に自分は襲われなかつたろうという気がする。そしてそう言われてもなお、自分は助かろうと思ひ、何かしら努力をしたろうという気がする。それはねずみの場合と、そう変わらないものだったに相違ない。で、またそれが今来たらどうかと思つてみて、なおかつ、あまり変わらない自分であらうと思うと「あるがまま」で、気分では願うところが、そう実際にすぐは影響はしないものに相違ない、しかも両方が本当で、影響した場合は、それでよく、しない場合でも、それでいいのだと思つた。それはしかたのないことだ。

そんなことがあつて、またしばらくして、ある夕方、町から小川に沿うて一人だんだん上へ歩いていった。¹⁸山陰線のトンネルの前で線路を越すと道幅が狭くなつて道も急になる、流れも同様に急になつて、人家も全く見えなくなつた。もう帰ろうと思ひながら、あの見える所までというふうな角を一つ一つ先へ先へと歩いていった。物がすべて青白く、空気の肌ざわりも冷え冷えとして、もの静かさがかえつてなんとなく自分をそわそわとさせた。大きな桑の木が道端にある。向こうの、道へ差し出した桑の枝で、ある一

「両方」がさして
るものは何か。

18 山陰線 山陰本線。

10

16

つの葉だけがヒラヒラヒラヒラ、同じリズムで動いている。風もなく流れのほかはすべて静寂の中にその葉だけがいつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くのが見えた。自分には不思議に思つた。多少怖い気もした。しかし好奇心もあつた。自分は下へ行つてそれをしばらく見上げていた。すると風が吹いてきた。そうしたらその動く葉は動かなくなつた。原因は知れた。何かでこういう場合を自分もつと知つていたと思つた。

6

だんだんと薄暗くなつてきた。いつまで行つても、先の角はあつた。もうこちらで引き返そうと思つた。自分は何気なく脇の流れを見た。向こう側の斜めに水から出ている半畳敷きほどの石に黒い小さいものがいた。¹⁹いもりだ。まだぬれていて、それはいい色をしていた。頭を下に傾斜から流れへ臨んで、じつとしていた。体から滴れた水が黒く乾いた石へ一寸ほど流れている。自分はそれを何気なく、しゃがんで見ていた。自分は先ほどいもりは嫌いではなくなつた。とかげは多少好きだ。やはり虫の中でも最も嫌いだ。いもりは好きでも嫌いでもない。十年ほど前によく蘆の湖²⁰でいもりが宿屋の流し水の出る所に集まつているのを見て、自分がいもりだったたらまらないという気をよく起こした。いもりにも生まれ変わったら自分はどうするだろう、そんなことを考えた。そのころいもりを見るとそれが思ひ浮かぶので、いもりを見ることを嫌つた。しかしもうそんなことを考えなくなつていた。自分はいもりを驚かして水へ入れようと思つた。

15

10

19 いもり
両生類。
イモリ科の



20 蘆の湖 神奈川県箱根山にある湖。

不器用に体を振りながら歩く形が思われた。自分はしゃがんだまま、脇の小まりほどの石を取り上げ、それを投げてやった。自分は別にいもりを狙わなかった。狙つてもとも当たらないほど、狙つて投げることの下手な自分はそれが当たることなどは全く考えなかった。石はこつといつてから流れに落ちた。石の音と同時にいもりは四寸ほど横へ跳んだように見えた。いもりは尻尾を反らし、高く上げた。自分はどうしたのかしら、と思つて見ていた。最初石が当たったとは思わなかった。いもりの反らした尾が自然に静かに下りてきた。すると肘を張つたようにして傾斜に堪えて、前へついていた両の前足の指が内へまくれ込むと、いもりは力なく前へのめつてしまった。尾は全く石についた。もう動かない。いもりは死んでしまった。自分はとんだことをしたと思つた。虫を殺すことをよくする自分であるが、その気が全くないのに殺してしまったのは自分に妙な嫌な気をさした。もとより自分のしたことではあつたがいかに偶然だつた。いもりにとつては全く不意な死であつた。自分はしばらくそこにしゃがんでいた。いもりと自分だけになつたような心持ちがしていもりの身に自分がなつてその心持ちを感じた。かわいそうに思うと同時に、生き物の寂しさをいっしょに感じた。自分は偶然に死ななかつた。いもりは偶然に死んだ。自分は寂しい気持ちになつて、ようやく足元の見える道を温泉宿のほうに帰つてきた。遠く町外れの灯が見え出した。死んだ蜂はどうなつたか。

16

その後の雨でもう土の下に入ってしまったらう。あのねずみはどうしたらう。海へ流されて、今ごろはその水ぶくれのした体をごみといっしょに海岸へでも打ち上げられていることだろう。そして死ななかつた自分は今こうして歩いてゐる。そう思つた。自分はそれに対し、感謝しなければ済まぬような気もした。しかし実際喜びの感じは湧き上がつてはこなかつた。生きてゐることと死んでしまつてゐること、それは両極ではなかつた。それほどに差はないような気がした。もうかなり暗かつた。視覚は遠い灯を感じただけだつた。足の踏む感覚も視覚を離れて、いかにも不確かだつた。ただ頭だけが勝手にほたらく。それがいつそうさういふ気分[☆]に自分を誘つていつた。

三週間いて、自分はここを去つた。それから、もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かつた。

「図」そういう気分とは、
どのような気分か。

志賀直哉



一八八三年（明治一六）——一九七一年（昭和四六）。小説家。宮城県生まれ。

一九一〇年（明治四三）、武者小路実篤・有島武郎らと雑誌『白樺』を創刊、同誌創刊号に『網走まで』を発表以来、『白樺派』を代表する作家として活躍した。

【主な著書】『赤西蠣太』『和解』『小僧の神様』『暗夜行路』など。

【出典】『志賀直哉全集 第三巻』によつた。



文庫版の一つ。『小僧の神様』『清兵衛と鯛』などの代表作を取りまとめた短編集。

デザインの本意

原研哉

柳宗理のデザインした日用品が静かに注目されている。たとえば薬缶^{やかん}。何の変哲もない普通の薬缶である。しかし実に堂々として、薬缶はやっぱりこれに限る、と思わせる説得力に満ちている。

薬缶の用途は単純だ。水道の蛇口から水を注ぎ入れて加熱器にかける。ガスでも電磁調理器でも同じことだ。湯が沸くと、注ぎ口から湯気が立ち上り、それを急須や保温ポットに移す。柳宗理の薬缶は、そんな日常の行為を無理なく自然に行うための道具として、すばらしくよくできている。把手^ての握り心地やたつぷりした注ぎ口の造形はいい意味で鈍みがあり、安心感がある。ずんぐりと座りのいい胴や蓋の膨らみには、用の美に徹した設計者の誠意がみなぎっているようだ。少し前まではイタリア製の、幾何学的にエッジの立ったケトル³がなにやら目を奪い、時代の先端を切り裂いて進んでいるかのよう⁵に感じられたものだ。しかし最近ではむしろそういう物のほうが時代がかって見える。



1 柳宗理 一九五—二〇二
工業デザイナー。



柳宗理の薬缶

2 エッジの立った 先鋭的な。
3 ケトル 平底の薬缶。

この感覚は決して懐古趣味の流行やリバイバル・ブームではない。消費の欲求に駆られて、目を三角にして「新しさ」を追い求めていた僕らのアタマが、少し平熱に戻って、まともに日常の周囲を見渡すゆとりができたということではないだろうか。柳宗理の薬缶はアンティークでもないし、古きよき時代を象徴するノスタルジ⁶の産物でもない。ごく普通の工業製品として、日常の動作にきれいに寄り添っているということだ。

デザインとはスタイリングではない。物の形を計画的・意識的に作る行為はたしかにデザインだが、それだけではない。デザインとは生み出すだけの思想ではなく、物を介して暮らしや環境の本質を考える生活の思想でもある。したがって、作ると同様に、気づくということの中にもデザインの本意がある。

僕らの身の回りにある物はすべてデザインされている。コップも、蛍光灯も、ボールペンも、携帯電話も、床材のユニット⁸も、シャワーヘッドの穴の配列も、インスタントラーメンの麺の縮れ具合も、計画されて作られているという意味ではすべてがデザインされていると言っている。人間が生きて環境を成す。そこに織り込まれた膨大な知恵の堆積の一つ一つに覚醒していくプロセスに、デザインの醍醐味¹⁴がある。ふだんは意識されない環境の中に、それを意識する糸口¹⁶が見つかっただけで、世界は新鮮に見えてくる。人間は、世界を四角くデザインしてきた。有機的な大地を四角く区画し、四角い街路

8 ユニット 規格化された部品。
*何の変哲もない
*座りのいい
*目を奪う
*時代がかった
*目を三角にする
*醍醐味

図のようなことに「気づく」のか。

4 リバイバル 昔の風俗や流行が復活したり、再評価されたりすること。
5 アンティーク 骨董品。古美術品。
6 ノスタルジー 昔を懐かしく思う気持ち。
7 スタイリング ここでは、工業デザインにおいて、デザインの型だけを変えること。

を設けて、そこに四角いビルを無数に建ててきた。四角い自動ドアからビルに入り、四角いエレベーターに乗って昇降する。四角い廊下を直角に曲がって、四角いドアを開けると四角い部屋が現れる。そこには四角い家具、四角い窓が配されている。テーブルもキャビネットもテレビも、それを操作するリモコンも四角い。四角いデスクの上で四角いパソコンの四角いキーを打ち、四角い便箋に文字を出力する。その便箋を入れる封筒も四角く、そこに貼る切手も四角い。そこに押される消印は時に丸いけれども。

なぜ人類は環境を四角くデザインしたのだろうか。見渡してみると、自然の中には四角はほとんどない。四という数値が自然の中になくはないはずだが、四角は非常に不安定なので、具体的に発現することが少ないそうだ。ごくまれに、完璧な立方体の鉱物の結晶など見ることがあるが、この造化の妙はむしろ人工的に見える。

おそらくは、直線と直角の発見、そしてその応用が、四角い形をこれほど多様に人間にもたらした原因だと思われる。直線や直角は、二本の手を用いれば、比較的簡単に具体化することができる。たとえばバナナのような大きな葉を二つに折ると、その折れ筋は直線になる。その折れ筋をそろえるようにもう一回折ると、直角が得られるのである。その延長に四角がある。つまり四角とは、人間にとって、手を伸ばせばそこにある最も身近な最適性能あるいは幾何学原理だったのである。だから最先端のパソコンも携帯も、

9 キャビネット 飾り棚。戸棚。

10

15

★そのフォルムは古典的なのだ。そういえば、スタンリー・キューブリックの映画「二〇〇一年宇宙の旅」に出てくる観智のシンボル「モノリス」は、黒くて四角い板のようなものであった。

円もまた、人間が好きな形の一つである。古代神具の鏡も、貨幣も、ボタンも、マンホールの蓋も、茶碗もCDも正円である。初期の石器の中央に正円が完璧にくり抜かれているのを見て驚いたことがあるが、硬い石をドリルのように回転させて、より柔らかい石をくり抜くと、ほぼ完璧な正円の穴を得ることができる。これもまた、回転という運動に即応して人の二本の手が、頭脳による推理や演繹より先に、正円を探り当てていたかもしれない。いずれにしても、簡潔な幾何学形態は、人間と世界の関係の中に合理性に立脚した知恵の集積を築いていく基本となっている。人間は、四角に導かれて環境を四角くデザインしてきた。そしてそれに劣らず円形にも触発されて、日用品に少なからず円を適用してきたのである。

ボールは丸い。野球のボールもテニスのボールもサッカーボールも丸い。ボールが丸い理由からいすぐわかると思われるかもしれないが、最初から丸いボールがあつたわけではない。精度の高い球体を作る技術は、石器に丸い穴を開けるのとはわけが違う。だから初期のボールは精度の高い球体ではなく、比較的丸いという程度のものであったはず

15



図「そのフォルムは古典的なのだ。」というのなぜか。
10 スタンリー・キューブリック Stanley Kubrick (左) 監督。アメリカの映画監督。「二〇〇一年宇宙の旅」は、一九六八年に公開されたSF映画。

だ。しかし比較的丸いという程度のボールでは球技は楽しめない。スポーツ人類学の専門家によると、近代科学の発達と球技の発達は並行して進んできたという。つまり球体の運動は物理法則の明快な表象であり、人間は、知るに至った自然の秩序や法則を、球体運動のコントロール、つまり球技をすることで再確認してきたというわけである。ボールが丸くないと、球技の上達は起こり得ない。同じ動作に対するボールのリアクションが一定でないと、テニスもサッカーも上達は望めない。そのためには完全な球体に近いボールが必要であり、それを生み出す技術精度が向上するにしたがって、球技の技能も高度化してきたというわけである。

球と球技の関係は、物と暮らしの関係にも移行させて考えることができる。柳宗理の薬缶もその一つだが、よくできたデザインは精度のいいボールのようなものである。精度の高いボールが宇宙の原理を表象するように、優れたデザインは人の行為の普遍性を表象している。デザインが単なるスタイリングではないと言われるゆえんは、球が丸くないと球技が上達しないのと同様、デザインが人の行為の本質に寄り添っていないと、暮らしも文化も熟成していかないからである。これを悟ったデザイナーたちは、精巧な球を作るように、形を見いだそうと努力するようになる。住居を住むための機械と評した建築家のル・コルビュジエも、イタリアをデザイン王国に導くことに寄与したプロダ

11 表象 直観的に心に思い浮かべられる像。具象。

12 ル・コルビュジエ
Le Corbusier (一八七
一—一九六五)。フランスで活躍した建築家。



13 アッキレ・カステリ
オーニ Achille
Castiglioni (一九一
一—二〇〇五)。イタリアの

クトデザイナー、アッキレ・カステリオーニも、ドイツの工業デザインの知的な極まりをひととき世に知らしめたデザイナー・ラムスも、日本の柳宗理も、目ざしたものは同じ、暮らしを啓発する、物の形の探求である。

柳宗理の父、柳宗悦は日本の民芸運動の創始者であった。民芸とは、用具の形の根柢を長い暮らしの積み重ねの中に求める考え方である。石灰質を含んだ水滴の、遠大なるしたたかりの堆積が鍾乳洞を生むように、暮らしの営みの反復が形を育む。川の水流に運ばれ研磨されてできた石ころのように、人の用が暮らしの道具に形の必然をもたらすという着想である。その視点には深く共感できる。

しかし、水流に身を任せて何百年も僕は待つわけにはいかない。技術革命は速度と変化を同時に突きつけてくる。そこに必要なものは理性と合理性を携えて自分たちが生きる未来環境を計画していく意志だ。つまり、志を持って形を作り環境をなすこと。近代社会の成立とともに人々はそのような着想を生み出した。それがデザインである。それは富の蓄積へとつながる発想ではない。経済の勃興を目ざすだけでは得られない豊かさを伴うこと。この着想を、僕は何度でもかみしめ直せばいい。

今日、僕はボールを丸く作り得ているだろうか。ずんぐりと鈍い柳宗理の薬缶を見ながら、そんな思いを反芻している。

デザイナー・建築家。
14 デイーター・ラムス
Dieter Rams (一九三
一—)。ドイツの工業デ
ザイナー。



15 柳宗悦 一八八〇—一九六五。
民芸研究家・宗教哲
学者。



16 鍾乳洞 雨水や地下
水が石灰岩を溶かし
て生じた洞窟。

17 暮らしの営みの反
復が形を育む」とは
どういうことか。
18 「この着想」とはどの
ような着想か。

原研哉



一九五八年(昭和三十三年)。グラフィックデザイナー。岡山県生まれ。デザインをコミュニケーションの観点から考え直し、デザインの新たな可能性を提示し続けている。

【主な著書】『ポスターを盗んでください』『デザインのデザイン』『白』など。
【出典】『日本のデザイン——美意識がつくる未来』によった。

学習

■筆者が「柳宗理の薬缶」を「説得力に満ちている」(二六・三)と評するのはなぜか、考えてみよう。

■次の関係について、それぞれ説明してみよう。

- 1 球と球技の関係(二六・九)
- 2 物と暮らしの関係(二六・九)

■「今日、僕らはボールを丸く作り得ているだろうか。」(二六・一五)という問いかけから、筆者のどのような思いが読み取れるか、考えてみよう。

言葉と表現

■「目を三角にする」(二六・二)のように、ものの形に注目した慣用表現を調べてみよう。

■「アタマ」(二六・二)とかたかなで表記されている理由を考えてみよう。

【新出】柳(川柳) 沸(沸騰) 須(必須) 鈍(鈍足) 胴(胴体) 麵(麵類) 堆(堆積) 箋(便箋) 封(密封) 筒(水筒)
【漢字】硬(硬度) 劣(卑劣) 秩(秩序) 遍(遍歴) 悦(満悦) 蓄(貯蓄) 勃(勃発)

評論のしるべ 7

芸術論への案内

日本的な感性を生かしたデザイン活動を行っている原研哉は、デザインとは「もの」を介して暮らしや環境の本質を考える「生活の思想」であり、それは個人の独自性や天才的な才能というような「芸術性」の表れではなく、暮らしの積み重ねによって研磨された形の追求こそを重視するものであると述べる。

原研哉はその代表的な例として柳宗理の作品を取り上げ、そこに「用の美」を通して人の行為の普遍性を表象しようとするデザインの典型を見る。宗理の父・柳宗悦は日本の民芸運動の提唱者であったが、「民芸」とはまさに非個人性や無銘性に価値を置き、民衆の日常生活の中に生きている美の世界を再発見する活動でもあった。

海外では十九世紀のウィリアム・モリスによる、生活と芸術とを一致させようとしたアーツ・アンド・クラフツ運動が有名であるが、このような「ものの作り」の思想は、やがて二十世紀モダン・デザインの源流となり、現在の工業デザインにも大きな影響を与えている。

日本では柳宗悦から多くを学んだ鶴見俊輔が、非専門家によって作られ、非専門家によって享受される芸術を「限界芸術」(Marginal Art)と呼んだ。芸術を生活との関係において捉える考え方は、岡本太郎などの芸術観にも見ることができ。

限界芸術論



鶴見俊輔
限界芸術論

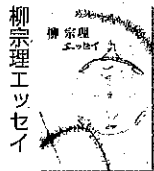
◇鶴見俊輔

岡本太郎

今日の芸術

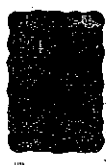
今日の芸術

◇岡本太郎



柳宗理エッセイ

◇柳宗理



日本のデザイン

◇原研哉

「純粋芸術」と「大衆芸術」に対して、茶の湯・遊び・祭り・落書き・盆栽・書道など、人々の暮らしの中に生き続けてきた、芸術と生活の境界線上に位置するものを筆者は「限界芸術」と呼ぶ。柳田国男、柳宗悦、宮沢賢治、黒岩涙香らに触れながら考察される画期的な芸術論。

芸術の本質とは、常に過去の作品を乗り越えることであると同時に、「他人」とではなく、自分自身の問題であり、生活自体だ」と主張する。芸術を芸術家たちの独占物とせず、生活の中の必要物と考えることで、前衛芸術と日常生活とのつながりが強調される刺激的な一冊。

デザインとは、機能、材料、経済などの要素を組織し、「用即美、すなわち人間生活に適した美しいものに仕上げる」とであるという。また、本当の美はおのずと生まれるものであり、決して作り出すものではないという筆者の理念が、自作の解説を通して実践的に語られている。

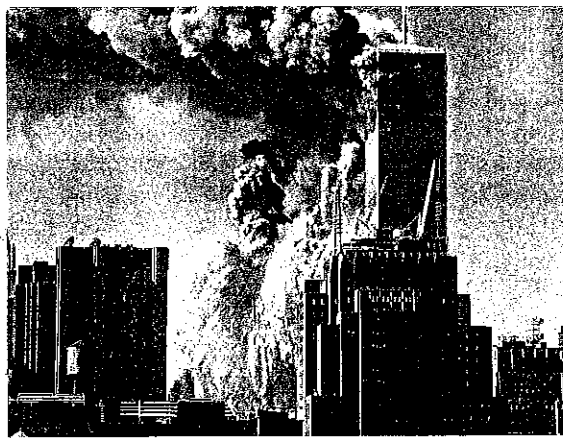
潜在する可能性を可視化し、人々と共有するビジョンを明確に描き出すところに「デザインの真実がある」という。繊細、丁寧、緻密、簡潔といった日本的な感性に基づきながら、ものや環境をしつらえていく「美意識」こそが、日本の未来における「感覚資源」になると説く。

グローバリズムの「遠近感」

うえだのりゆき
上田紀行

話を、二〇〇一年九月一日にニューヨークの世界貿易センタービルを襲った、衝撃的なテロ事件から始めたい。その後のアフガン、イラク戦争へと続く、世界戦争の幕開けであったが、それは紛れもなく「生きる意味」の戦争でもあった。それはアメリカにとっては、「遠近感」を喪失した世界の中で、まさに「遠近感」に直面させられる出来事だったという意味でも、大きな出来事だった。

アメリカは一度も本土を攻撃されたことのない国である。アメリカにとっての戦争と



攻撃された世界貿易センタービル

- 1 世界貿易センタービル ニューヨーク、マンハッタンのシンボルであったツインタワー。
- 2 テロ テロリズムの略。政治的目的のために暴力に訴える主義・行為。
- 3 アフガン、イラク戦争 アフガニスタン紛争(二〇〇一年)とイラク戦争(二〇〇三年―二〇一〇年)。

は、独立戦争と南北戦争を除けば、常に自国から遠く離れたところでの戦争であった。湾岸戦争を大半のアメリカ人はテレビの前で、遠い地の出来事として見ていた。NATO軍のコソボ空爆もそうだ。メディアから流れる、遠近感が喪失された情報として接していた。

日本人は戦争における「遠近感」を知っている。東京大空襲で東京は焼き尽くされ、広島と長崎に投下された原爆によって、一瞬のうちに二つの都市が多くの生命とともに消滅した。自分が生まれ育った土地が破壊され、灰燼と帰すときの、すべてが失われ、自分自身も失われてしまうようなショックを、ある世代までの日本人は知っている。もともと、そのショックは自らの土地で起こったから気づいたのであって、日本軍が遠い土地を攻撃しているときは、現地の人々が感じるであろう悲しみと喪失感にはほとんど気づいていなかったのだが。

勝ち続けていたときの日本と同じく、アメリカの戦争もこれまで常に自国の外部で行われてきた。だからアメリカ人は、ゲリラを一掃しようと枯れ葉剤をまいてジャングルを破壊し、村々を焼き払うという行為がベトナムの人々にどんな喪失感をもたらすかを想像することはできなかった。空爆で都市を破壊し尽くすことが、そこに生きる人々にとってどんな苦痛をもたらすことなのか、自分の身に同じことが起こったらどのような

- 4 独立戦争 一七七五年―一七八三年。
- 5 南北戦争 一八六一年―一八六五年。
- 6 湾岸戦争 一九九〇年―一九九一年。
- 7 NATO 北大西洋条約機構。軍事同盟の一つ。
- 8 コソボ空爆 一九九九年。コソボはバルカン半島中部の国。
- 9 メディア マスコミュニケーションの媒体。

図「遠近感が喪失された情報として接していた」とは、どういうことか。

- 10 ゲリラ 奇襲などを行う小部隊。
- 11 枯れ葉剤 毒性の強い除草剤。化学兵器として用いられた。

な状態になるのかというレベルでは感じる事ができなかった。そこに生きる人間にとって、その土地への「愛着」が実存を支えているとは、想像することができなかったのである。

そのアメリカのまさに中心とも言うべきニューヨークが、あのような衝撃的な形で攻撃された。それは、アメリカにとって世界の「遠近感」を強烈に感じさせる出来事だっただろう。

その「遠近感」をめぐる問題は、実は二重の意味が重なり合っている。それは今述べたようにアメリカという国家の問題であるとともに、アメリカが主導するグローバリズムの問題でもある。なぜならば「遠近感」の喪失とは、グローバリズムの本質でもあるからである。

モノが移動していた工業化時代の資本主義には、国境があり、¹³タイムラグがあつた。

地球の裏側からモノを運んできてこちら側で売るためには、それが重いものであれば数か月かかった。だから、一度石油の備蓄量が減少すると、その状態を補えるまで石油不足が続いてしまつたりする。そして、モノが国境を越えるには、さまざまな手続きが必要だった。

しかし、資本主義はモノの資本主義からカネと情報が流通する資本主義へと変化する。

¹² グローバリズム 地球規模で経済活動を行うこと。

¹³ タイムラグ 時間のずれ。

工業化社会から¹⁴ポスト工業化社会へ。それは、モノが動いていくのではなく、投資という形でカネと情報が動いていく資本主義である。金融の自由化により、資金の動きは国境に縛られることなく世界中を自由に、瞬間的に動いていく。国際短期資本の瞬間的移動、それがグローバル経済の主役となり、ヘッジファンドが世界中の至る所で大量の資金を動かす、たとえばタイのバブル経済とその崩壊といった、一国の経済状況の存亡すらを決定づけることになる。また、個人投資家一人一人にとつても、ロンドン市場から資金を引き揚げ、ニューヨーク市場で買いに入る、などということが、マウスのクリックだけでできるようになる。世界中を情報とカネが瞬時に自由に動いていく、それがグローバル経済なのである。

日本市場が閉鎖的だと非難されたのは、まさにそういったグローバル経済システムに対する障壁があつたからだ。しかし今やそれが解除され、私たち一人一人がこうしたシステムに直面する時代が到来しようとしている。

そうしたグローバル化された経済は「遠近感」のないシステムである。東京で投資していた資金が瞬時にロンドンに動く。その資金がまた瞬時に香港¹⁵に動く。ここは儲かりそうだしということになれば、北半球だろうが南半球だろうが関係ない。一万キロ離れた場所にある企業への投資であらうが、私の自宅の隣にある企業への投資であらうが、原

¹⁴ ポスト「その後」「の次」を表す接続語。

¹⁵ ヘッジファンド 高い利回りを目的とした投機的基金。

¹⁶ バブル経済 資産価値が、実情とかけ離れて高騰した経済状況。

則的には全く何の変わりもない。世界はこのシステムに参入している限り、遠近感を失い、世界中のどの場所も等価なものとなるのである。

これは、少なくとも経済においては、世界の各地が「交換可能」になったことを意味する。東京であろうが、ロンドンであろうが、上海であろうが、リオデジャネイロであろうが、投資の対象として見れば、それらは交換可能な存在である。東京がダメなら上海へ、ロンドンへと、資本は儲かるほうへ自由に移動していく。



ニューヨーク証券取引所

17 IT革命とは、そうしたグローバル化の技術的裏打ちにほかならなかった。また金融自由化とはその制度的裏打ちにほかならない。アメリカは金融自由化という制度的な流れへと世界を導き、技術的にはすでに他国に一步も二歩も先んじていた。IT革命の中心地として、巨額の富を生み出し、一人勝ちの状態であった。そして、世界を「遠近感」なしに、情報を操作して資金を動かす、そのグローバル経済システムの象徴が、ニューヨークの世界貿易センタービルだったのである。

図「世界中のどの場所も等価なものとなる」のはなぜか。

17 IT information technology (英語) の略。情報技術。

しかし、その世界貿易センタービルが攻撃されて明らかになったのは、遠近感なき、交換可能なグローバル経済の象徴であるこのビル、そしてそこに働く人々の存在は、アメリカの人々にとっても確実に遠近感の中にあり、交換可能なものであったということだ。このビルはどこかわからぬ空中に浮かんで存在していたのではなく、ニューヨークという一つの都市の中心にそびえ立っていた。それは瞬時に移動する情報として存在していたのではなく、鉄骨やコンクリートという重さを持ったモノでできており、一瞬にして破壊され地球の重力によって大地に落下し、瓦礫となつて積み上がった。そしてその瓦礫の中に多くの人々が埋もれ、絶命したのである。その命は、家族にとって、友人にとって、交換不可能な、かけがえのないものであった。

遠近感なきグローバル資本主義というシステム、しかしその中で私たちは遠近感のある「場」の中で生きている。身近な人の命が突然失われれば、私たちは身の引き裂かれるような痛みに茫然自失する。私たちの記憶に深く刻み込まれた建造物が失われれば、私たちは自分自身が深く傷つけられたような思いにとらわれる。

遠近感なき経済システムと遠近感の中にある私たちの「生きられた場」の間には、明らかな対立が存在している。9・11がえぐり出したのは、こうした世界の構図そのものだったのである。

図「生きられた場」とは何か。

18 9・11 本文冒頭の事件をさす。

*裏打ち

*茫然自失

上田紀行



一九五八年（昭和三十三年）一。文化人類学者。東京都生まれ。スリランカ、インド、チベットなどでフィールドワークを行い、文化人類学の観点から考察する癒やしや、仏教に関する研究を行っている。

【主な著書】「かけがえのない人間」「肩の荷」をおろして生きる」など。

【出典】「生きる意味」によった。

学習

□ 次の語を、本文に即して「遠近感あり」と「遠近感なし」に分類してみよう。

- ・ 遠い地の出来事
- ・ 身近な人の命
- ・ 交換可能なもの
- ・ 投資の対象

□ 「遠近感」の喪失とは、グローバル化の本質でもある「

（二六・九）とはどういうことか、考えてみよう。

□ 筆者の言う「遠近感」の意味をまとめてみよう。

言葉と表現

□ 次の語句の意味を説明してみよう。

- 1 灰燼と帰す（灰燼に帰する）（二六・七）
- 2 裏打ち（二六・八）
- 3 茫然自失（二六・十二）
- 4 えぐり出す（二六・十五）

□ 「インターネット」を例にして、「遠近感」について自由に話し合ってみよう。

新出
漢字

衝（衝突）

喪（喪服）

攻（専攻）

湾（港湾）

掃（清掃）

融（融和）

縛（束縛）

鎖（鎖国）

巨（巨大）

評論のしるべ 8

グローバル化論への案内

上田紀行は、右肩上がりの経済成長の時代がバブル崩壊によって終わるとともに、個人の「生きる意味」が見えなくなったと考える。冷戦体制終焉後に進行したグローバル化の動きに呼応して、日本でも市場原理を重視する「構造改革」が展開されたが、上田はそこでは遠近感を失った世界が生まれ、個人の生は交換可能なものに貶められて、その「かけがえのなさ」は希薄化し、「生きる意味」がより不透明になったと分析する。

グローバル化とは、地球規模の共通基準に基づいて世界全体の経済を一元化しようとする考え方で、思想や政策として積極的に推進されるために、その影響は経済のみならず、文化や社会全般にまで行き渡る。

従来の国家や地域の境界を越える枠組みとして、グローバル化への期待は大きく、世界各国の政策はそれに追随する傾向にある。しかしながら、グローバル化については、アメリカなど大国の資本が経済の覇権を掌握して富が一部に集中し、格差社会を招いたとする見解も少なくなく、伊豫谷登士翁らが批判的な考察を進めている。また、環境破壊や移民問題とグローバリズムとの関連については、都市社会学のサスキア・サッセンが「グローバル・シティ」で、さらにリスク社会論のウルリヒ・ベックが「世界リスク社会論」において論じている。

生きる意味

◇ 上田紀行



グローバル化とは何か

◇ 伊豫谷登士翁



グローバル経済入門

◇ 杉山伸也



筆者は、現代社会の問題の本質を、「生きる意味」が見えなくなったことだと考える。個人が交換可能な素材となり、「かけがえのなさ」を喪失したと分析し、その原因をバブル崩壊後の社会構造から探る。構造改革などの日本の状況を、世界規模で進行するグローバル化の問題と結びつけることで、経済至上主義が持つ弊害を考察していく。

冷戦終結以後、国境を越えて広がるグローバル化という新しい現象を考究することは、従来の国民国家を基盤とした研究を乗り越える可能性があることを示唆する。一方で伊豫谷は、グローバル化の台頭を警戒しながら、グローバル資本が生み出す格差と統合の二極化に対して、どのように抵抗するかにあると説く。

グローバル化の進展は、地球規模で世界史を再構築するグローバル・ヒストリーという方法を生み出した。杉山はこの方法的立場から、ヨーロッパ中心の経済史を克服し、アジア経済圏との関係を視点にグローバル経済がどのように形成されたかを構造的・俯瞰的に捉え直す。今日のグローバル化の問題を歴史的に考察するための契機を提示している。

土佐日記

紀貫之

門出

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。

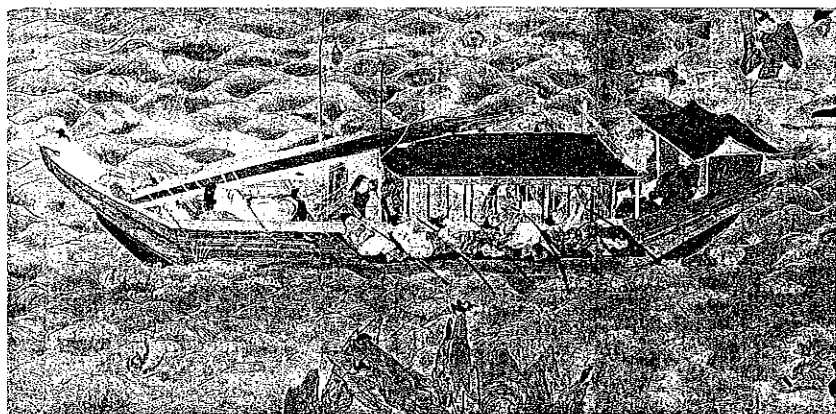
1 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
2 1 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
3 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
4 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
5 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
6 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
7 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
8 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
9 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
10 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
11 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
12 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
13 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
14 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
15 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。

ある人、県の四年五年果てて、例のことどもみなし終へて、解由など取り、住む館より出でて、船に乗るべき所へわたる。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろよくくらべつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりに、とかくしつ、ののしるうちに、夜更けぬ。
二十二日に、和泉の国までと、平らかに願立つ。藤原のときさね、船路なれど、むまのはなむけす。上・中・下、酔ひ飽きて、いとあやしく、潮海のほとりにて、あざれ合へり。

- 1 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 2 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 3 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 4 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 5 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 6 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 7 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 8 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 9 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 10 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 11 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 12 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 13 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 14 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。
- 15 男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。

人あり。この人、国に必ずしも言ひ使ふ者にもあらざなり。これぞ、たはしきやうにて、むまのはなむけしたる。守柄にやあらむ、国人の心の常として、「今は。」とて見えざるを、心ある者は、恥ぢずになむ来ける。これは、ものによりてほむるにしもあらず。

二十四日。講師、むまのはなむけしに出でませり。ありとある上・下、童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬ者、しが足は十文字に踏みぞ遊ぶ。



平安時代の舟旅(『北野天神縁起絵巻』)

- 12 国 国司の役所。
- 13 ぎなり 「ぎるなり」の音便「さんなり」の「ん」が表記されない形。

- 14 講師 国分寺の僧侶。国内の僧尼を管理し、仏の教えを講じる者。
- 15 しが足は その足は。「し」は代名詞。

まことにて名に聞くとこる羽ならば飛ぶがごとくに都へもがな

とぞ言へる。男も女も、いかでとく京へもがなと思ふ心あれば、この歌、よしとにはあらねど、げにと思ひて、人々忘れず。この羽根といふ所問ふ童のついでにぞ、また昔へ人を思ひ出でて、いづれの時にか忘るる。今日はまして、母の悲しがるることは、下りしときの人の数足らねば、古歌に「数は足らずで帰るべらなる」といふことを思ひ出でて、人のよめる、

世の中に思ひやれども子を恋ふる思ひにまざる思ひなきかな
と言ひつつなむ。

11 古歌「古今集」に「北へ行く雁ぞ

鳴くなる連れて来し数は足らずで帰るべらなる」(羈旅 よみ人知らず)とある。

12 べらなる……するようだ。「べらなり」は、平安時代に、主として和歌に用いられた助動詞。

学習

■二十七日、十一日の二つの記事の中で、「京にて生まれたりし女子」(三・一)は、いろいろな呼び方で記してある。抜き出してみよう。

■「まことにて」の歌を、作者はどのように評価しているか、考えてみよう。

■次の傍線部の文末表現の意味・用法と、その効果を考えてみよう。

- 1 母の悲しがるることは。(三・四・五)
- 2 と言ひつつなむ。(三・四・八)

帰京

京¹に入り立ちてうれし。家に至りて、門^{かど}に入るに、月明^{あかり}ければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまして、言ふかひなくぞこぼれ破れたる。家に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。「中垣こそあれ、一つ家のやうなれば、望みて預かれるなり。」「さるは、たよりごとに、ものも絶えず得させたり。」「今宵、かかること。」「と、声高^{こゑたか}にももの言はせず。いとほつらく見ゆれど、こころざしはせむとす。

さて、池めいてくぼまり、水つける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ、かたへはなくなりけり。今生ひたるぞ混じれる。おほかたの、みな荒れにたれば、「あはれ。」とぞ人々言ふ。思ひ出でぬことなく、思ひ恋しきがうちに、この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき。船人^{ふねうぢ}もみな、子たかりてのしる。かかるうちに、なほ悲しきに堪へずして、ひそかに心知れる人と言へりける歌、

生まれしも帰らぬものをわが宿に小松^{こまつ}のあるを見るが悲しき
とぞ言へる。なほ飽かずやあらむ、またかくなむ、

1 京に入り立ちて一月三十日に和泉の国に着き、淀川を上つて、二月十六日の夜、京へ入った。

2 家に預けたりつる人の心も 家だけでなく、預けておいた留守番の人の心も。「家に」の「に」は、これを「を」に通ずる用法と解するなど、諸説がある。

■「ものも言はせず」は、誰が、誰に、どのようなことを言わせないのであるか。

■「いかがは」の意味は何か。

3 船人 同じ船でいつしよに帰京した人々。

■「小松」は、先にどのように書かれていたか。

見し人の松の千年に見ましかば遠く悲しき別れせましや
忘れがたく、くちをしきこと多かれど、え尽くさず。とまれかうまれ、と
破りてむ。

学習

□ この文章の前半部(三・五・六まで)と後半部とでは、記事の重点に違いがある。その違いを簡潔にまとめてみよう。

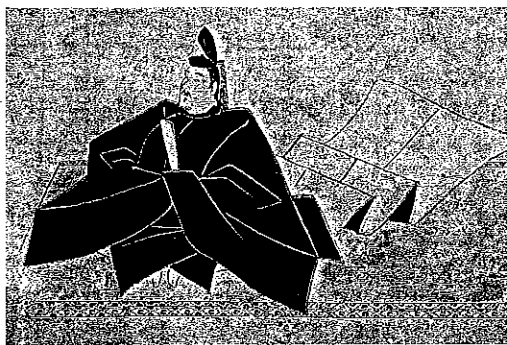
□ 後半部の記事の「松」について、次のことを考えてみよう。

- 1 「松」は前半部とどのような関わりを持っているか、考えてみよう。
- 2 「松」の記事と二首の和歌とはどのような関わりを持っているか、和歌の中の「小松」「松の千年」の言葉を中心にして、考えてみよう。

□ 次の傍線部を、文法的に説明してみよう。

- 1 千年や過ぎにけむ、(三・五・八)
- 2 みな荒れにたれば、(三・五・九)
- 3 言へりける歌、(三・五・一二)
- 4 とく破りてむ。(三・六・二)

■ 土佐日記 日記。作者は紀貫之。九三五年(承平五)ごろに成立。土佐守の任期を終えた作者が、国司の館を門出してから帰京するまでの旅日記。自らを国司に仕える女性に仮託して書いている。本文は『新日本古典文学大系』によった。
紀貫之?—九四五? 『古今和歌集』の撰者の一人。平安時代の仮名文学の先駆者として活躍した。



紀貫之(『上皇本三十六歌仙絵』)

4 見し人 ここは、亡き女兒のこと。

土佐を發つて懐かしい京へと旅立つにあたって、貫之は「和泉の国まで」無事に着くようにと願をかけている。なぜ「京まで」ではなく、「和泉の国まで」なのだろうか。

土佐から京への航路には、室戸岬や鳴門海峡をはじめとする難所が多く、危険に満ちていた。そもそも、当時の船の造りでは、天候が崩ればたちまち海に飲み込まれてしまう。『土佐日記』には、悪天候のために船が出せず、同じ場所に何日もとどまったり、ようやく船出しても同じ港に引き返さざるを得なかったりしたiraだちが書き留められている。

加えて、海賊の存在にも脅かされた。貫之が海路で京に向かった九三四年(承平四)前後は、瀬戸内海を中心とする西国で海賊が跋扈して、朝廷もその対策に手を焼いていた。『土佐日記』の中にも、「このわたり海賊の恐れあり。」(二月二十三日)、「海賊追ひ来。」(二月二十五日)など、海賊におびえる記述が、徳島県沿いを北上して畿内に向かうあたりから見られるようになる。難所中の難所である「阿波の水門」(鳴門海峡)を横断するにあたって、一行はあえて危

険な夜間航行を行っているのだが、それも「海賊は夜歩きせざなりと聞きて」(二月三十日)、つまり「海賊は夜に活動しないと聞いて」のことであつた。海賊の難を避けるためとはいえ、月末の闇夜の中を鳴門海峡に漕ぎ出していく心細さは、どれほどであつたことか。鳴門海峡を渡り、淡路島の南側を進み、紀淡海峡を越える航路は、五十キロメートルほどで、一度に航行する距離としてはこの旅最長である。船中の人々は、運命を舵取りの手に委ね、ひたすら神仏に祈るしかなかった。この最大の難所を越えることで、ようやく畿内へ帰れるのである。

和泉の国に到着した一月三十日の記事には、「今日、船に乗りし日より数ふれば、三十日あまり九日になりけり。今は和泉の国に来ぬれば、海賊ものならず。」とある。「和泉の国までと、平らかに願立つ」という記事は、門出の翌日の十二月二十二日のこと。ここまで実に一か月以上かかっていることになる。危険な海の旅におびえ続けた日々からようやく解放された安堵感が、高らかに表出されているといえよう。

先從^ツ隗^{くわい}始^{メヨ}

十八史略

戦国時代、燕国では王の噲が無能で、遊説家の甘言にのせられ、臣下に王位を譲つて隠居するなど乱脈な政治が行われ、混乱の極みにあつた。その隙に乗じた斉の攻撃により、噲は殺されてしまった。

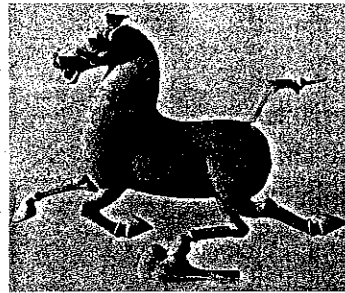
燕人立太子平。為君。是為昭王。弔死問生、卑辞厚幣、以招賢者。問郭隗。曰：「齐因孤之国乱而襲破燕。孤極知燕小不足報。誠得賢士与共和国、以雪先王之恥、孤之願也。先生視可者。得身事之。」

- 1 戦国時代 三三二ページ注1参照。
- 2 燕 三三二ページ注3参照。
- 3 噲 前三三二ページ注3参照。
- 4 齐 三三四ページ注3参照。
- 5 昭王 前三三二ページ注3参照。
- 6 弔死問生 戦死者を弔い、生存者を見舞う。
- 7 卑辞厚幣 へりくだった言葉遣いをして、多くの礼物を用意する。
- 8 郭隗 生没年未詳。燕の賢者。
- 9 孤 諸侯の自称。
- 10 報 仕返しをする。復讐する。
- 11 共和国 国事を相談する。
- 12 先王 亡くなった父王、燕王噲のこと。
- 13 可者 ふさわしい人物。
- 14 得身事之 ぜひその人に師事したい。「身」は、自分自身の意。

学習

「郭隗の弁舌の巧みさはどこにあるか、考えてみよう。」
 「隗より始めよ」の本来の意味と、現在使われている意味とは同じかどうか、調べてみよう。

隗曰：「古之君有以千金使涓人求千里馬者。買死馬骨五百金而返。君怒。涓人曰：『死馬且買之。況生者乎。』馬今至矣。」
 不期年、千里馬至者三。今王必欲致士、先從隗始。況賢於隗者、豈遠千里哉。於是昭王為改築宮、師事之。於是士爭趨燕。



馬蹄飛燕

- 郭隗の「古之君」に始まるたとえ話はどこまでか。
- 15 涓人 君主のそば近くに仕え、雑用や掃除に従事する人。
 - 16 千里馬 一日に千里を走るほどの名馬。
 - 17 期年 まる一年。
 - 18 致士 賢人を招き寄せる。
- 「先從隗始」とは、具体的に何をせよというのか。

*使^ツ（使役）
 「に」を「さ」させる。
 *且^ツ。況^ツ乎。抑揚^ツでさえである。
 まして「に」においてはいうまでもない。
 *「於」^ツ（比較）「より」も。
 *豈^ツ哉。（反語）どうして「よう」か、いや、ない。